The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	転換期における「ダーチャ」と人びとの生活 : フード・セキュリティの視点から
Author(s)	思, 沁夫
Citation	GLOCOLブックレット. 2010, 3, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

転換期における「ダーチャ」と人びとの生活
フード・セキュリティの視点から

思沁夫 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教

「食料」と「食糧」の使い分け方:語源から見ると、「料」という字は米を量ることを意味する。しかし、後世では使い方が変化し、モノを作る時に用いる「原料」、あるいは「材料」を指すようになった。一方、「糧」の語源はリスクに備えて貯蔵する(準備する)フードを指す。この意味から発展し「食糧」の意味でよく使われるようになった。そのため、ダーチャで穫れ、直接生活で消費する作物などを指すときは「食糧」という表現を用い、加工された「作物」(あるいはその目的のため)を指すときは「食料」ということばを使う。

1. 問題の所在

1991年、ソ連が崩壊し、同地では長年蓄積された矛盾が一気に噴出した。国家が崩壊したことにより、政治、民族や宗教対立、葛藤が表面化し、独立、分裂の動きを促し、地域社会は再編を余儀なくされた。しかし、歴史の転換期においておこっているのは、目に見える変動、変化ばかりではない。社会システムが機能停止、あるいは麻痺した時、表面下で人びとの生活は不安、危機にさらされている。

また、国家が破綻し、地域社会が再編のプロセスに動いた時、人びとはヒューマン・セキュリティ(human security)の問題に直面すると同時にフード・セキュリティ(food security)の危機にもさらされる。特にロシアにおいては、その歴史、政治や文化の特殊性によって、フード・セキュリティの問題はヒューマン・セキュリティの問題でもあった[1]。

ロシアのフード・セキュリティの問題を考えるとき、ダーチャに注目することが大変有効なアプローチではないかと考える。後述するようにダーチャのロシア農産物収穫量に占める比重は高い。そのためダーチャは人びとが危機を乗り越えるための手段になってきた。ダーチャという「場所」での人びとの実践から社会的、文

1　スターリンの罪といえば「粛清」や「収容所群島」などをまず思い浮かべる人が圧倒的に多いのではないかと思う。しかし、20世紀にロシアで起きた「飢餓」はヨーロッパの国の中で最大規模である。スターリンの農業集団化政策が1930年代以降のソ連の慢性的農業の不振と食糧不足の原因にもなったと考える専門家もいる。前者に関してはロバート・コンクエストの『悲しみの収穫―ウクライナ大飢饉―』(恵雅堂出版　2007年)が詳しい。後者に関してS・プラギンスキー、V・シュヴィドコーの『ソ連経済の歴史的転換はなるか』(講談社現代新書　1991年)を参照してほしい。

化的な特徴も読み取ることができる。ダーチャは「ロシア的な存在で、ロシア文化そのものである」と表現する歴史研究者もいるくらいである(Гайдар 2006)。しかし、なぜかダーチャはフード・セキュリティの観点からほとんど注目されてこなかった。ロシア人なら誰でも無縁ではないダーチャの存在と私たちの関心とのあいだに差があるのには、大きくふたつの理由があると考えられる。ひとつ目は「経済」に対する捉え方である。ダーチャとは人びとの「趣味」の経済であり、「国民経済」というカテゴリーには属さないと判断されていることに起因する。ふたつ目はソ連・ロシアにおいて党、国家は絶対的な存在であったことに起因する。人びとの主体性は常に軽視され、否定され、排除されてきた。そのため、「小さな物語」は歴史の表舞台に出にくかった。いや、出てはいけなかったのである。

2. はじめに

ロシアはヨーロッパの一員に数えられながら、アジア的な要素も色濃く感じられる。宇宙開発、軍事産業などG７諸国と肩を並べた分野もあれば、そうではない分野も数多く存在する。また、ロシアは自然資源が豊富で広大な土地を持ちながら、長いあいだ、飢饉、モノ不足を経験してきた。政治、政策制度だけではなく、天候、自然状況に影響される農業はロシアがかかえる矛盾を最もよく、そして象徴的に示していると思われる。

物質的に著しく豊かになった20世紀になってからも、ソ連・ロシアでは、飢饉が度々発生し、それによって大量の命が奪われた。例えば、スターリン政権下で実施された農業集団化によって悲劇的な食糧不足がおこったことは、象徴的な出来事であった。旧ソ連の農業政策は国内事情、国際事情(特に冷戦対立)によって、大きく変化したが、ソ連が崩壊するまで、国家の強い統制下で土地などをめぐる自由な取引と生産の主体性が厳しく制限されたことは一貫して続けられた。しかし一方、ロシアの強権的な国家の存在は、農民や市民に「自分の生活(食糧)を自分で守る」道を開いたとも考えられる。言い換えれば、食糧の確保は常に国家戦略にとっての問題だけではなく、一般市民、農民にとっても自ら考え、判断し、そして実践しなければならないことでもあった。特に、戦時下や政治混乱期においては、人びとの行動は自分の生活を守っただけではなく、国や社会も支えたといわれている。

近代農業は産業化、工業化や都市化によって形作られたと考えられる。そのプロセスにおいて、多くの人口が土地から「解放」されたため、農業に従事する人口は大幅に減少した。また、農業自体も合理化の波にさらされ、技術革新などによって大きな変貌を余儀なくされた。農業は家族、コミュニティや地域社会を養う存在から、巨大化する都市(人口)の胃袋を満たすための「供給地」と化し、ビジネスの道へと進んだ。さらに、絶え間ない技術の刷新、ビジネスの拡大によって、金さえあればほぼ何でも入手できる国や地域は世界の東西を問わずに数多く出現した。時々私たちは現代社会においてフード・セキュリティの問題はもう解決されたと錯覚に陥ることさえある。

ロシアはさまざまな特殊な事情を抱えているとはいえ、このような構造変化は、18世紀から、特に1861年の奴農制度廃止以降に加速したと考えられる。都市化と都市人口の増加がそれを端的に示している。例えば、1913年にロシア総人口の5分の4を占めていた農民は、1950年代半ば以降は半分以下までに減った。そして、1980年代以降は先進国並みの水準に達した[2]。しかし、ロシアの事情はヨーロッパ、アメリカ、日本、そして社会主義国である中国とも大きく異なることに注意しなければならない。本論の趣旨からそれるため詳しくは述べないが、ロシアの農業は、政治や政策に翻弄されてきた過去を経験したが、農民の菜園(副業)、市民のダーチャで作られたジャガイモ、野菜や果物が大きな比重を占め、人びとの生活の安定に重要な役割を果たしたと言っても過言ではない。

最近になって、ロシアの農業集団化、農業や食に関する研究は日本語文献を含め急速に増えているが、農民の「副業」である菜園や市民のダーチャがどのような状況下で形成され、どのような役割を果たしてきたかを、人びとの対応に視点をすえた実証的な研究はまだあまり見られないように思う[3]。特に、ダーチャと人びととの関係に関する研究は大変稀である。

本論では市民の台所を支えてきたダーチャに注目し、2004年から2006年にかけてクラスノヤルスク市で見聞したことを通して、

2　2009年のロシアの統計によると、ロシアの総人口は1億4,000万人以上で、そのうち都市人口は約1億1,000万人である。
3　例えば、奥田央編『20世紀ロシア農民史』(社会評論社、2006年)など。

ソ連崩壊後の歴史の転換期におけるダーチャと人びととの関係を記述する。そして市場経済の影響がますます強くなるなかにおけるダーチャの役割の変化を考察する[4]。

3. ダーチャとフード・セキュリティ

20世紀初頭、モスクワ郊外のダーチャについて張偉は文豪チェーホフを引用しながら以下のように描写している。

> 昔、村には地主と農民しか住んでいなかった。しかし、いまはダーチャに住む都会人が現れ、全ての都市、無名な小さな町までもダーチャに包囲されようとしている。20年後にはダーチャに住む人は何倍も、何十倍も増えていることだろう。そして、いまはベランダで優雅にお茶を楽しんでいるが、あまり時間を待たずに、彼らは農民のように手に鋤を握り、畑を耕すことだろう。（張偉 1959）

写真1　モスクワ郊外に広がるダーチャ区

チェーホフの指摘はロシアにおけるダーチャの普及、ダーチャの変化を見事に捉えている。

ロシア人にとって、ダーチャとは郊外にあり、ジャガイモ、野菜、果物、花を栽培し、自然を感じる場所である（写真1）。毎年5月から9月にかけては「ダーチャ・シーズン」といわれ、モスクワ、サンクトペテルブルクなどの大都会では週末になるとダーチャに行く車で町が大渋滞になるなど、ダーチャと人びとの生活との関係は大変深い。特に、フード・セキュリティの観点から見た場合、その重要性は一層明白である。

ロシアの統計（1997年）によると、ロシア全体では2,200万世帯がダーチャを所有しており、その総面積はおよそ182万ヘクタールである。ダーチャで栽培した作物は、ロシアの作物の全体において、ジャガイモの90パーセント、果物の77パーセント、野菜の73パーセントを占める。

4　本論は筆者が2004年から2006年にかけてロシアで経験したことに大きく依存しているが、その後の電話インタビュー、および短期調査によって得た資料も参照している。

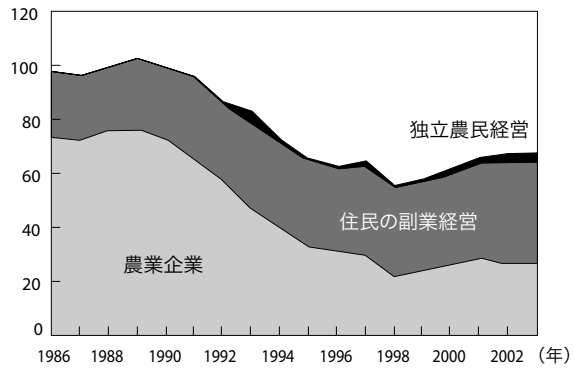

図1　農業生産量の経営類型別推移
（1990年の総生産量=100）
＊住民の副業経営がダーチャによるものである。出所：山村理人 2009年。

ソ連崩壊後、もともと基盤が弱かったロシアの農業は深刻な状況に陥った。この危機を乗り越えるために、また、土地に関する取引の自由化が進んだという背景もあり、ダーチャは大いに注目された。プーチン政権下でロシアの経済は回復し、中央省などでは農業の改革が進められ、また農産物の輸入も増加したが、ダーチャでとれた作物の比重はそれによって大きく変動していない。むしろ増加している（図1を参照：山村理人 2009）。

いまダーチャの利用は地域や家庭の経済状況、趣味、交通手段などによって多様化する傾向にある。しかし、菜園としての機能（ジャガイモ、野菜、果物、花などを栽培する）の重要性には根本的な変化はない。特に年金生活者や低所得者にとって、ダーチャは生活の一部分であり、なくてはならない存在である。

4. ダーチャとは

そもそもダーチャとは何であろうか。露日辞典などではダーチャを「別荘」と訳している。訳は間違いではないが、私たちが考えている別荘とロシア人が利用している別荘＝ダーチャは大きく異なる。場合によっては別のものと考えてもいいぐらいである。

ロシア語文献によると、ダーチャはピョートル大帝の時代にすでに存在したといわれる[5]。しかし、ほとんどの家庭がダーチャを

5　ダーチャの語源は「ダーチ」＝「与える」という意味である。皇帝が功臣や貴族に「土地」を与えることに由来している。

持ち、全国的に普及したのはソ連時代になってからである。

ソ連時代、政府は慢性的な食糧難を克服するため、農民には0.2ヘクタール(シベリアでは1ヘクタール)、都市住民には6アールの土地利用を許可し、ジャガイモ、野菜などの栽培を認めた。無償で土地が与えられたとはいえ、ほとんどの場合、その土地は農村周辺や森のなかの未開拓地であったため、作物栽培ができるまでには大変な苦労が費やされたといわれている。ダーチャが増えるとダーチャ区が形成され、「ダーチャ組合」が作られ、管理された。当時は畑の広さ、栽培できる作物の種類(飼養は基本的に認めない)などが決められており、ダーチャで建造物を立てることは認められなかった[6]。

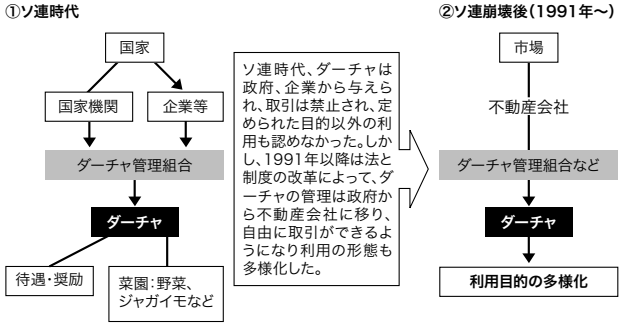

図2　ダーチャのソ連崩壊後の変化

すでに触れたように、ダーチャはソ連崩壊後深刻な食糧難や土地制度の改革に伴い大きく変化した(図2を参照)。変化の特徴としては利用の多様化(後述)が挙げられる。結論を先にいうとダーチャは国家権力によって与えられた「ご褒美」から市場で取引する「商品」へと変わりつつある[7]。

5. 調査地の概要

クラスノヤルスク市は17世紀にロシア人がエニセイ川を南下し、今の同市の中心部当たりで要塞を作ったことから始まったと言われている。要塞を作った当初の目的は身を守ることであったが、ロシア人の支配地域が拡大するにつれて先住民から毛皮を集める場所として機能し、さらに帝政ロシアのシベリア開発の拡大に伴い、人口が徐々に増え始めた。しかし、クラスノヤルスク市が今日ある形を形成したのは第二次世界大戦中からである。1930年代、ソ連のヨーロッパ部分に危機が迫ってきた頃、多くの工場がソ連のヨーロッパ地域からクラスノヤルスク市や同市の周辺地域に移転した。第二次世界大戦後、クラスノヤルスク市はヨーロッパから、そしてアメリカからも遠く離れている位置にあったため、工業化に並んで軍事産業も発展した。

クラスノヤルスク市はクラスノヤルスク地方の中心都市で、2005年の時点で総人口は91万人である。クラスノヤルスク市は大河エニセイ川を挟んで西と東に分かれ、かつての要塞は西側にあり、いまは政府関係の建物や文化施設が集中している。東側は1930年代ヨーロッパ地域から多くの工場が移転することに伴い広がった地区で、いまも工場から出る煙で町は深刻な被害を受けている[8]。

クラスノヤルスク市の郊外には至る所にダーチャが見られる。クラスノヤルスク市のダーチャ組合のWebサイトによると、クラスノヤルスク市の約70万人が郊外でダーチャ、あるいは畑を持っている。ダーチャの総数は30万戸(そのうち18万戸は組合に未登録の状態)で、この30万戸のダーチャを1,042のダーチャ組合が管理している。かつて、人びとはダーチャを持ったとき、組合に入り、組合費を払い、組合に道路の建設や修理を依頼し、またダーチャ区の治安を維持してもらっていたが、近年は森を開拓しダーチャを作る場合も、またダーチャの売買も住民同士間で行われ、組合を通さない場合が多く、組合の機能は大きく低下しつつある。

ロシアのヨーロッパ地域と比べて、クラスノヤルスク市は都市化が遅れただけではなく、気候も大変厳しい(寒い)ため、ダーチャの利用開始は大変遅かった。今記録されているのは1930年代ぐ

6　「個人副業経営規則」などの政府規定によって、ダーチャでの活動は管理されていた。

7　ソ連時代には土地は国家の所有物で、土地に関するあらゆる取引は全面的に禁止された。しかし、ペレストロイカ期にソ連時代の制度は農業不振を招いたと考えられ、1990年2月にソ連土地基本法が採択され、土地改革が開始された。特に2001年10月に「土地法典」が採択されてから、ロシアの土地改革は新しい局面を迎えた(取引の自由化、手続きの簡潔化など)。さらに、ダーチャの利用に関しては、2006年に採択された「不動産登録手続き簡易化に関する法」(ロシア人に「ダーチャ恩赦法」と呼ばれている)によって、ダーチャを売ったり、買ったりする、いわゆる取引の自由化が進んだと考えられる。

8　東地区にはアルミ工場を初め重金属の工場が多く、ロシアで最も汚染が深刻な町のひとつである。ソ連時代汚染は隠されていたが、ペレストロイカ以降は調査研究が進められ、公開され、その実態が知られるようになった。東地区は西地区に比べてアパートの家賃は安い。これも町の汚染と関係している。

図３　ダーチャ１、２、３の位置
注：この図はグーグルが提供しているサービスを利用して作られた。
個人情報を保護する観点から、この図は調査したダーチャの大体の位置を示す程度にとどまっている。

らいからである[9]。クラスノヤルスク市ではダーチャは1970年代から、特に1980年代末から急速に増えた。

ここでは、3つの事例を紹介し、ダーチャ利用の実態を考えたい。

5.1　リリヤ（50代、女性）の場合[10]

リリヤはクラスノヤルスク大学の事務員で、家族構成は娘と2人で、クラスノヤルスク市の中心部の市営住宅に住んでいる[11]。リリヤはダーチャを持っていない。彼女の場合、両親が所有するダーチャを両親と一緒に利用している。

両親のダーチャは市の南にあり（図3の「ダーチャ1」を参照）、リリヤの家からは車で約40分かかる。ダーチャは1980年代リリヤの父が機械工場で働いていた時、企業組合から与えられたものである。リリヤの父の話によると、組合に指定された土地（ダーチャ）は雑草と木が生茂る未開拓地で、道路や水道もなかった。会社の同僚、親戚、友人などの助けを借りて、約2年間の時間を費やしてやっと作物を栽培できる環境が整えられたという[12]。

9　データはhttp//kprifkrask.ru/content/view1166/2（2009年12月）によるものである。
10　本論のインフォーマントの年齢はすべて2010年現在のものである。
11　筆者は2004年9月から2005年2月までリリヤの家に滞在した。この部分データは彼らと一緒に生活した時に得られたものである。
12　2年間といっても、平日は会社に勤務しているので、大体は2年間の週末の時間と夏季休暇の時間を利用したことになる。

写真２
リリヤたちのダーチャの一部

写真３
リリヤたちのダーチャで取れた野菜

2004年9月、筆者は彼らと一緒に彼らのダーチャを訪ねた。たくさんのダーチャが密集し、ダーチャの周りを森や林が囲み、ダーチャ区はひとつの集落になっている感じがした。実際、人びとはよく協力しあい、常にコミュニケーションをとりながらダーチャを利用していた。例えば、物を借りる、また、人手が足りない時は力を借りるなど色々な形で協力し合っていた。

リリヤたちのダーチャには畑、木造の家、バーニャという蒸し風呂、農具などを入れるための小屋、畑に水を入れるための缶、簡単なトイレなどがあった。ダーチャ全体の面積は6アールである。周りのダーチャも同じような構造であった。ダーチャには井戸がないため、雨水を貯めて利用する。自分が貯めた水が不足した場合、井戸がある右隣のダーチャに分けてもらう。電気は通っていた（電気、道路などはこの地区を管理する組合が行う）。

リリヤの話によると、最近経済が良くなり贅沢な時間（休暇、遊びなど）を過ごすためのダーチャも増えているが、彼女たちの場合は、父が労働者で、母が主婦だったので、生活があまり良くなかった。そのため、ダーチャは昔も今も生活を支える存在である[13]。特に父と母はジャガイモ、キュウリ、トマト、ピーマン、キャベツ、カボチャ、ネギ、ビーツ、ニンジンなどを栽培し、夏のほとんどの時間をダーチャで過ごす（写真2、3）。昔、ダーチャには建物を作ってはいけなかった。ダーチャの周りには自然以外に何もなかったので、今のように長期滞在はできなかった。リリヤの小さな木造の家は2001年、二階建ての寝泊まりもできる家に改造された。

リリヤも両親も車を持っていない。しかし、バスや電車がダーチャの近くまで通っていないため、車がないとダーチャには行け

13　調査時点で、リリヤの両親は年金生活者であった。

ない。リリヤたちがダーチャに行くときは、ほとんどの場合リリヤの友人か従兄に頼んで送ってもらう（リリヤたちがガソリン代を出す場合もある）。彼らは車の運転、さらに畑仕事の手伝いもする。

毎年の5月からリリヤの両親はダーチャに通い始め、畑の手入れをし、栽培の準備に取り掛かる。天候にもよるが、5月末頃から6月にかけてジャガイモや野菜の栽培を始める。この頃からリリヤの両親はほとんど街に戻らず、畑の世話をし、ダーチャで過ごす。リリヤは週末を利用し、両親がほしいものを届け、畑仕事の手伝いもする。少し暑くなると、親戚や友人たちを誘ってしばしばダーチャでパーティを開く。リリヤの従兄（30代）はお金持ちのロシア人は海外に行って過ごすが、お金がない貧乏なロシア人はダーチャで過ごす、これがロシア流だという。

ダーチャの仕事は9月後半、時には10月まで続く。9月になると、街の中は急に年配者が増え、いたるところで、自家製のものや森から取ってきたものを売る人を見かける。しかし、最近、町にスーパーが増え、モノが入手しやすくなったため、秋になって自家製の野菜、ジャム、ハチミツや漬物を売る人が大きく減っている。

シベリアの大変厳しい環境の中で、ジャガイモや野菜を育てるのは大変な仕事で、多くの労力と努力が必要だが、一年の半分以上が零度以下、あるいは零度近くという厳しい自然条件のなかで、収穫したものを保存するのも大変な仕事で、さまざまな工夫が必要である。ジャガイモやニンジンは穴式倉庫に入れて保存する方法が、シベリア地域では最も一般的な保存方法である[14]。ジャガイモは温度に敏感で、暖かいと発芽してしまい、寒すぎると凍ってしまうため、倉庫の中の温度を12度前後に維持することがコツだという。もうひとつには塩づけし、瓶や缶に入れて密封して保存する方法がある。

リリヤは自分の穴式倉庫を持っていない（五階建てのアパートの三階に住んでいる）ため、両親のところを利用している。ジャガイモとニンジンは選別してから、倉庫に入れる。キュウリ、トマト（熟していない緑のまま）は塩漬けし、瓶に入れて密封すれば長く利用できる。キャベツやカボチャなどは倉庫の棚に並べて保存する。

14　基本的には家（台所が多い）や倉庫の床に穴を掘り、そして穴の周りを木やレンガで固定して作る。この地方では家の中で作られた場合は、4〜5メートルの深さがあれば、保存に必要は温度が保たれる。ジャガイモやニンジンは土や砂の上におくが、野菜などは棚の上におく。

キャベツはスライスし、塩漬けして保存することもある。

リリヤの母の話によると、ジャガイモ、ニンジン、ビーツはほぼ毎日消費するが、市場から買うことはほとんどない。ジャム（自分のリンゴの木でとれたリンゴや近くの林で取れた木の実などで作る）やハチミツ（リリヤの叔父からもらう）もほとんど自家製で足りるという。

リリヤたちは自分で消費する目的でダーチャの畑を作っているが、ジャガイモ、ニンジン、ビーツの2割、野菜の4〜5割、ジャム、漬物の1〜2割は親戚や友人たちに贈答している。また、少し売る場合もある。

ダーチャで取れたものが食卓にのぼり、どのように消費されているのかを2004年10月2日の献立を例に見ると以下のようになる。

リリヤは筆者とダーチャについて話しをする時、「ダーチャ」ということばはほとんど使わない。代わりに「オゴロド＝菜園」ということばを使う。リリヤは金を持っていないから、ダーチャで重労働しなければならないと思っている。リリヤの娘オーリャも母親と同

リリヤ一家の献立

朝食の材料

①市場で手に入れたもの：パン（黒、白二種類）、紅茶、チーズ、ハム、砂糖、クリーム、ミルク、ヨーグルト類

②自分で作ったもの、交換によって得られたもの：ハチミツ、ジャム、キュウリの漬物、トマト

昼食と夕・夜食の材料*

①市場で入手したもの：塩、豆、パン、米、小麦粉、肉（豚、或は牛）、たまご

②自分で作ったもの、交換によって得られたもの：ジャガイモ、ニンジン、キャベツ、ネギ、キュウリの酢漬け、トマト、塩漬けトマト（緑色）、ピーマン、塩漬け魚**、塩漬けキノコ***

注

*　昼食はジャガイモ、ニンジン、キャベツ、塩漬けキュウリを肉と一緒に煮込んだボルシチ（ворщ）で、夕食はソバ粥にジャガイモ・サラダ、ニンジン・サラダであった。

**　塩漬け魚はエニセスク町に住んでいるリリヤの叔父が、エニセイ川やその支流から取った魚（マス類が多い）を塩漬けして送ってくる。リリヤたちはお礼にジャムやハチミツ、塩漬けキュウリなどを送ることが多い。

***　塩漬けキノコ（作り方は取ったばかりのキノコを塩水で茹でる）はリリヤの友人からもらったものである。

じ考えである。しかし、リリヤの両親は彼女たちと違う考え方を持っている。畑の仕事は大変だが、ダーチャの空気は綺麗だし、自然に触れることもできるので、ダーチャの生活はとっても健康的だという。ダーチャについて見方は分かれるが、ダーチャを必要としていることには変わりはない。

5.2 エリーナ(58歳、女性)の場合

エリーナはトレーナー会社で販売部門の部長を務め、クラスノヤルスク市の大学に通っている息子(ワロージャ)と2人で、同市の大学が集中している地区「学園都市」の市営住宅に住んでいる。

エリーナは1997年、夫と一緒に同僚(エリーナの夫の同僚)が所有していたダーチャ(畑と土地だけ)を買った。ダーチャは森のなかにあり、面積も広い。エリーナたちは週末などの休みの時間を利用し、友人や同僚たちと一緒に、二階建ての木造の家(250平方メートル)を建て、さらにプール(8×12メートル)も作った(図3「ダーチャ2」を参照)。しかし、ダーチャが完成して間もなく(1999年)、エリーナは病気で夫を亡くした。

2005年5月末、筆者はエリーナとワロージャと一緒にダーチャを訪ねた。私たちはエメリヤーノブ村の近くに車を止め、森の中を約15分歩いてダーチャに到着した。2週間前、ワロージャは友人を連れて、畑を手入れしたため、この日は筆者とワロージャはジャガイモを植え、ニンジンの種を蒔いた。エリーナは花の種を蒔いた。近くに川があり、筆者はワロージャと一緒に川水をタンクにいれ、タンクをリヤカーに乗せ、ダーチャに運んだ(約200メートル離れている)。そして、運んだ水を畑に撒いた。合計7時間の労働であった。市のアパートに戻った時はかなりの疲れを感じた。

その後はキュウリとトマトも植えた。筆者は7月から8月にかけて調査に行ってクラスノヤルスクにいなかったが、エリーナとワロージャは、時に一緒に、時に交代で作物の世話をした。9月にクラスノヤルスクに戻った時、ダーチャで作ったジャガイモ、野菜は毎日にように食卓にのぼっていた。

2006年2月、ワロージャは市内にてエリーナの車を廃車にする事故を起こしたため、ダーチャに行く交通手段が無くなった。そのため、2006年には作物を作ることができなかった。さらに、2006年12月、ワロージャは結婚し、エリーナから離れて独立した。

エリーナの話によると、2006年を境に畑は作っていないが、孫と一緒にダーチャに滞在するのが大きな楽しみになっているという[15]。

2007年エリーナは年金生活者となった(ロシアの女性の退職年齢は55歳)。退職後、時間的な余裕が生まれ、そして何よりも孫と一緒に過ごしたい気持から、エリーナは冬を除いた時間のほとんどをダーチャで過ごすようになった。

近年エリーナのようにダーチャに長期滞在する人が増えている。その理由は様々であるが、エリーナは以下のように考えている。

> クラスヤルスク市では、経済状況はよくなっているが、退職後の再就職は簡単ではない。また、簡単に利用できる公共施設も少ないため、退職後ほとんどの時間をひとりで家で過ごすしかなかった。また、元の同僚や友人たちも仕事で忙しく、あまり訪ねて来ないため、寂しさと孤立感を感じた。しかし、ダーチャに長期滞在するようになってからは精神的によくなった。ダーチャでは自然が相手になってくれるので、あまり孤独感や不安感を感じない。また、子どもは大自然の中で成長するのが一番理想と思うし、ダーチャはまさにそのような場所である。暖かい季節になると、孫はほとんど外で過ごしている。

エリーナはさらに、息子夫婦は週末にダーチャで一緒に過ごすことが多く、ダーチャは一家が集まる場所にもなっているという。

退職後の時間をどのように過ごすかは収入状況や家族構成などによって異なるが、年金生活者の中には、ダーチャに長期滞在し、畑を耕し、あるいは花を植え、自然を楽しむ人が増えている。この変化(週末の利用から長期滞在へ)には経済的な理由があるが、市場経済を導入後の都市部の変化も考えられる。つまり、クラスノヤルスク市の経済状況はよくなり、町には活力が戻り、モノも豊かになりつつあるが、一方、個人と社会との関係が薄れ、社会との接点が減っている。すでに述べたように、ダーチャの利用は社会関係に大きく依存している。その社会関係が変化すれば、利用方法にも影響が及ぶと考えられる。

15　2009年9月筆者はロシアのチタ市でエリーナと再会した。彼女からダーチャについて色々話を聞くことができた。

5.3 ワロージャ（51歳、男性）の場合

ワロージャはクラスノヤルスク市の南にあるシフノコルスクという村に生まれ、大学時代をモスクワで過ごした。卒業後はクラスノヤルスクに戻り、2005年筆者が彼と知り合った時は国立師範大学の歴史学の先生を務めていた。ワロージャの家族は妻、長女、長男の4人である。

ワロージャのダーチャは彼が少年時代を過ごしたシフノコルスクの家である（図3「ダーチャ3」を参照）。彼はクラスノヤルスクの高校に進学するため、シフノコルスクを離れたが、彼の両親や姉がシフノコルスクの家にのこっていたが、彼の姉が地元の人と結婚し、家を離れ、また彼の父が病気で亡くなった後、母がクラスノヤルスクに引っ越ししてきたため、シフノコルスクの家には住む人がいなくなり、ワロージャはこの家をダーチャとして利用するようになった（写真4、5）。

シフノコルスクは山とエニセイ川に挟まれ、土地が狭い地域である。ワロージャたちの畑もやはり広くなかった。ワロージャの父は地元の小学校の先生だったが、母は農民だった。ワロージャによると、ソ連時代、この小さな菜園だけに自分たちが消費するジャガイモ、野菜を栽培することが許されていたため、ワロージャの母はいろいろ工夫して、できるだけ多くの種類のものを作ったという。またロシアになってからもワロージャの両親はジャガイモ、野菜、ジャムなどを作り、ワロージャたちに分け与えていたという。

写真4　右側にすわっている方がワロージャで、2005年11月筆者が彼のダーチャを訪ねた時の様子。テーブルの上に見える果物は菜園で取れたものである。

ワロージャの生家がワロージャのダーチャになってからも、いろいろな作物を作っていたが、ワロージャもワロージャの妻も仕事で忙しく、来られる日が少ないため、実際畑の世話はワロージャの姉一家が代わりにやっていた。

2005年11月、筆者はワロージャと一緒に彼のダーチャを訪ね、彼の姉夫婦に知り合った。その時聞いた話だが、ワロージャの姉夫婦には子どもが2人いて、クラスノヤルスクの大学に通っているが、高校の時から主にワロージャが面倒みているという。

写真5　シフノコルスク村一角

ワロージャによると、1990年代以降、ロシアの農村、特にシベリアの農村は深刻な状況に陥り、若者は進学や仕事を求めて都市部に流れ、人口が大幅に減ったため、空き家が増えた。一方、都市の人は食糧や自然を求めて郊外や農村に注目するようになった。このふたつの条件が重なり、村の空き家をダーチャにする人が現れたという。

もし村がなかったら、ダーチャの普及も考えにくい。どの地域のダーチャにも共通しているのは、村に隣接して作られていることである。農業集団化時代、多くの村に道路、電気、水道が整備された。多くの地域ではこのような条件（インフラ）がダーチャの普及につながったのである。ソ連時代、工業は大きく発展し、それに伴い都市部の人口が増えたが、農業の発展は遅れた。そのため、食糧問題は常に緊張状態にあり、政策の失敗や自然災害に遭遇するとすぐ食糧不足の状況に陥る。言い換えれば、度重なる食糧難の問題がダーチャの普及を促したと言える。

6. 終わりに

すでに述べたように、ダーチャに対する政策、法制度は大きく変化した。ここでひとつの情報を加えると、ソ連時代、ダーチャには住所がなかった。つまり、ダーチャがあった場所で住民登録ができなかった（認められなかった）。ダーチャは国家の所有物であり、ダーチャを利用する人も組織によって管理された存在であった。しかし、いまダーチャは不動産会社を通じて自由に売買できる物件（商品）になった。町の中心でマンション買うことも森のなかでダーチャを買うことも買う側の選択であり、法律や行政によって規定されない。実際、ネット上で不動産会社の広告から個人がのせた情報まで、ダーチャに関する取引情報は多く流れている。

さまざまな設備を備えた、冬でも快適に過ごせるダーチャも現れている。このようなダーチャはいまのところ交通が便利な、商業施設もある程度整っている場所に建設されることが多い。また、実際、ダーチャを生活の中心にする人も現れている（年金生活者などが多い）。

近年、外国から野菜、果物や食料品を大量輸入するようになり、食品安全問題が浮上している。食品安全の立場から、ダーチャの重要性を再認識する動きが都市を中心に見られる。自分で栽培し、作ったものは一番安全であり、安心して食べられる。また、食文化ブームもこの動きと相乗関係にある。ロシアの食文化は大変保

守的で、変化があまり感じられないといわれている(石毛 2005)。このことが正しいかどうかは別にして、ロシア人が自分の食にこだわり、愛着を持っているのは確かなことである[16]。

本論文では歴史の転換期において、社会システムが十分機能しなくなったとき、ダーチャが注目され、そしてどのように利用されてきたかを見てきた。国や地域社会の変化に伴い、ダーチャの利用が多様化していることについても触れた。これらの記述から、以下のことを少し強調しておきたい。

ダーチャは制度的に作られたものであるが、社会状況(出来事)に応じて人びとはその形を大きく変えつつある。また、フード・セキュリティの問題は経済状況だけではなく、世帯構成、親族関係、社会的なネットワークとも密接に関連している。さらに、フード・セキュリティの確保は社会関係の構築の問題でもある。

最後に、ダーチャと地域文化との整合性も考えられる。ダーチャで作る作物は各家庭の台所が必要としているモノ(食糧)ばかりである。それは地域の習慣、地理的な条件とも一致している。

「国民経済」を制度的なものと考えるなら、ダーチャは出来事の経済と言える。国全体で体系化、均一化を図り、常に「成長」を追い求める「国民経済」と異なり、ダーチャは地域、主体によって多様であり、人びとが置かれている状況に応じて利用の目的、方法も変化し得る。

また、見てきたようにダーチャの利用方法はいろいろ変化しているが、食糧を確保する、少なくとも自分で消費するジャガイモや野菜を作る場所(＝菜園)としての機能は今現在でも健在である。また、ダーチャで作った作物は各家庭が消費する食糧を供給するばかりではなく、親戚、友人などの社会関係の中でも流通させており、その関係を依存しながら関係維持にも作用している。

従って、ダーチャのフード・セキュリティの機能は歴史転換期において大きくなった。ロシアの社会状況の改善と人間関係の流動化、個人化で、フード・セキュリティの重要性を維持しながら多様化している。

しかし、ダーチャが最も集中しているモスクワ郊外での調査も

16　近年ロシアではファースト・フードや日本料理などの外来食が大変流行し、都市部を中心に食文化の変化も感じられる。しかし、ロシア人にとって、特に普通の人びとにとっては従来の食が最も基本であり、身近な存在である。

実現していないなど課題が多く残っているため、ここでは理論的考察を避け、研究の可能性を示すにとどめたい。

引用文献

奥田央編
2006　『20世紀ロシア農民史』東京：社会評論社。
カイプル, K. F. 他編
2005　『ケンブリッジ世界の食物史大百科事典 1』石毛直道監訳、東京：朝倉書店、p.258。
コンクエスト，ロバート
2007　『悲しみの収穫―ウクライナ大飢饉―』白石治朗訳、東京：恵雅堂出版。
沼野充義・沼野恭子
2006　『世界の食文化：ロシア』東京：農文協。
ブラギンスキー , S. 、V. シュヴィドコー
1991　『ソ連経済の歴史的転換はなるか』講談社現代新書、東京：講談社。
山村理人
2009　「ロシアの農業」加賀美雅弘、木村汎編『(朝倉世界地理講座10)東ヨーロッパ・ロシア』東京：朝倉書店、p.319。

張偉編著
1959　『契克夫文选』北京：人民文学出版社、pp.33-34。
Е.Т.Гаидар
2006　Гибель империи, Уроки для современнои России, Москва: Россииская политическая знциклопедия, p.56.
Н.И.Дроздов
2005　Красноярье: пять веков истории, Группа компании “Платина”, Красноярск: Коллекнв авторов.